

## 税所篤快「大地との遭遇」

こんな幼稚園あったら、入園したい！と思う中身充実の一冊でした。学生時代から、バングラデシュ、ソマリランド、パレスチナ難民キャンプ等を巡ってきた著者は、2021年に長野県小布施町へ引っ越しました。そこで、認定こども園「大地」に出会います。（ミシマ社2200円）



元々、著者夫婦は東京に住んでいました。ここは住むには魅力的な都市でしたが、子育てには「ずいぶん冷たい、息苦しい場所」だったようです。

「長野にある幼稚園『大地』は、日々の『暮らし』と『遊び』の中から創造的な学びをつくり出していた。子どもたちも保護者たちも自然の中で、自らの創意工夫を求められた。そこで生まれているのは、おそらく学力以前の生きる基礎体力、体の『幹』のようなものだと感じた。人間が持っている『野生の力』であり、『原始の力』と言ってもいいかもしれない。」

ここは貨幣経済に頼らず、自分たちの体と工夫次第で、自分たちの目指す生活を創造できる場所だったので。著者は、世界中を巡り”理想の教育”を探し求めてきたのですが、ついに見つけたのです。

ここで、日々子供たちは変わっていきます。ある日のこと、息子のたかちゃんと近所の庭を歩いていた時のことです。

「『え、たかちゃん！なんで草食べてるの！？』。彼は野に咲くクローバーを摘むと、むしゃむしゃと茎の方から食べ始めた。『うん、おいしいよ。パパも食べる？』。彼は平気な顔をしてクローバーを差し出した。その後はノビルも発見。掘り出しては、その小ぶりな球根をおいしそうに食している。」 二ヶ月ほど前まで都会の幼稚園にいて、公園の土ぐらいいしか触れていなかった彼が、野生の力を身につけてゆく姿が面白い！と書いています。

園長の青山さんが、保護者会でよく言うセリフがあります。それは「本当に楽しいことは、決して楽なことではない」。秋に催される「お父さんデー」で、著者はその意味を痛感します。朝6時、「大地」に集合。目的地は新潟、上越の海を見にゆくのですが、歩けるところは全て徒歩。しかも当日は雨。それでも出発し、電車に乗り、海へと向かいます。とある無人駅で降りると目の前は日本海。雨足は強くなり、風が吹きまくる悪天候。それでも海へ突入！もちろん、安全には最高度に注意してですが、しんどい目をして、海へ行き、疲労困憊して、

また「大地」まで戻ってくるという強行軍でしたが、みんな最後に食べたけんちんうどんに大喜びしました。

「たしかに人間は、少しくらい不快な思いや不便な思いをしないと、普通であることのありがたさを実感することはできない。もしこんなに寒い思いをしなかったら、たくさん歩いて疲れきっていなかったら、このけんちんうどんはここまでうまいだろうか。」と振り返ります。

幼稚園教育の本など滅多に読もうと思わないのですが、「こんな幼稚園ありかよ」と叫んだ著者の気持ちが十分わかりました。

その後、著者のドイツ留学に伴い一家は引っ越し、息子のたかちゃんは、現在ドイツのザールラント州公立小学校1年生です。自然の中で、どんな実や花が食べられるのかを見分ける嗅覚は一級品で、同級生たちに頼られているそうです。